

特別展「旧石器時代とはどのような時代だったのか!」

とっておき埋文講座①

「それは... 日本に象がいた頃」

この秋、埋蔵文化財センターに再現した旧石器時代の森には大きな象がいます。

今年の特別展では、わからないことが多いといわれる旧石器時代をとりあげました。昨年、開館40周年を迎えた埋蔵文化財センターですが、旧石器時代に特化した展示は実に初めての事です。

日本における旧石器時代の始まりについては諸説ありますが、およそ4万年前頃といわれており、富山県内では約3万年前から人々が暮らし始めたことがわかっています。そんな旧石器時代について、4つのコーナーから迫っていきます。



展示室前でお出迎え

I 旧石器の自然環境

現在は縄文時代から続く暖かい間氷期で、それ以前の旧石器時代は氷期の真っ只中でした。平均気温は現在よりも7~8℃低く、当時の富山は現在の北海道に似た気候だと考えられています。

寒冷期には海水面が低下したため、日本列島は大陸とほぼ陸続きのような状況でした。北方系のマンモス、ヘラジ

カや南方系のナウマンゾウ、オオツノジカなど大型哺乳類が存在したことが日本各地で出土する骨化石からわかっています。植生の様子も現在とは異なり、高山に見られる針葉樹や木の実が平野部に自生していたと考えられます。

展示では自然環境にまつわる図や写真から、寒かった時代背景を紹介しています。

II 富山県の旧石器

県内には旧石器時代の遺跡が約140あり、このうち約30遺跡で生活の跡を確認しています。特別展では当センター所蔵品を中心とした26遺跡、約300点の石器が一堂に会しています。



約3万年前の道具たち

石器は技法や年代から大きく6つのグループに分け、遺跡ごとに展示しています。

● 小型ナイフ形石器群

後期旧石器時代の初め、日本各地で確認される小型剥片を使うナイフ形石器で、局部磨製石斧と呼ばれる石斧と一緒に出土するのが特徴のひとつです。

立山町のほか南砺市の立野ヶ原丘陵で数多く見つかり、展示では、鉄石英やメノウなど地元で産出される石

材を多用していることも着目ポイントです。

● 石刃ナイフ形石器群

後期旧石器時代前半、東日本を中心に使われた縦長剥片から作るナイフ形石器です。

上市町教育委員会から資料をお借りした眼目新丸山遺跡は1948年(昭和23年)、北陸で初めて発見された旧石器時代の遺跡として有名です。

富山市直坂 I 遺跡の接合資料は、バラバラに出土した複数の剥片が接合し、割る前の原石の状態に復元できる資料で、石器製作の技術がわかる貴重なものです。

● 横剥ナイフ形石器群

近畿、瀬戸内地方を中心に分布する横長剥片から作るナイフ形石器です。

先の縦長剥片が東日本系であるのに対し、この横長剥片は西日本系。東西両方の技法が見られる富山県は国内でも非常に珍しい地域と言えます。従来、富山県は東西文化の混在・融合する場所と考えられてきましたが、はるか旧石器時代にその源流があったとは!ビックリです。

● 尖頭器石器群

後期旧石器時代後半、ナイフ形石器に代わり、槍先形の石器群が現れます。

南砺市立美遺跡の尖頭器をはじめとする石器は黒曜石で、分析の結果、青森県深浦産であることがわかりました。直線距離はなんと約540km! 旧石器人の遊動生活やルートを考える上で大変興味深い資料です。

● さい せき じん 細石刃石器群

後期旧石器時代終末期、国内で広く作られた、極めて小さな剥片を複数組み合わせさせて道具としたものです。県内で剥片は確認されていませんが、小矢部市日の宮遺跡では剥片を剥ぎ取った残りである石核が出土しています。

● み こ しば 神子柴文化系石器群

旧石器時代最終末から縄文時代草創期にかけて現れる東日本中心の石器群です。長野県神子柴遺跡で出土した大型・精巧な石斧や尖頭器と似た様相のものです。

富山市直坂Ⅱ遺跡や南砺市南原D遺跡で、表裏を入念に加工した尖頭器や、縄文時代への過渡期とみられる石鏃などがあります。

III 旧石器人のくらし

ある日の旧石器人として衣・食・住をジオラマ復元しています。

国内の遺跡から衣服の出土例はありませんが、身体の保護・保温には着衣が必要と考え、皮革製の衣服を復元しました。

食では焼けた礫の出土例などを参考に調理風景を考えました。みんなの憧れ、骨付き肉も良い具合に焼けています。このほか骨を打ち欠き骨髓を利用したり、アク抜きの要らない木の実や果実類を採集していたと考えられます。

住は発掘調査でみつかった柱跡から、簡単なテント状の住まいを復元しました。

ある日の旧石器人たちはそれぞれ狩りや料理、皮なめしなどの作業中です。ぜひ彼らのくらしぶりを覗いてみて下さい。



旧石器人のクッキング

IV 旧石器研究最前線

展示室に入っただけで目に飛び込むのが実はこのコーナー。



人気者！実物大「港川人」

アルカリ性土壌が多いため骨が残りのやすい沖縄は今、旧石器研究のホットスポットです。

50年前に発見された港川人は最新の研究をもとに、沖縄県立博物館によって全身模型がリニューアルされました。153cmの彼の隣に並ぶと、現代人との違いがあれこれ見つかって興味は尽きません。このほか石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡など、沖縄県での最新調査について紹介しています。

また、長野県の野尻湖ナウマンゾウ博物館での50年にわたる発掘調査の

成果についても紹介しています。実物大のナウマンゾウの臼歯や牙、ヤベオオツノジカの角など、大きさを実感してもらえるよう心がけました。



湖底堆積物「年輪」

さらに自然科学の最新分析として、年代測定の分野で世界から注目を集める福井県若狭町の水月湖年縞を紹介しています。「土の年輪」とも言われる湖底堆積物に含まれる炭素量の測定からは、一年毎に異なる過去の大気中の炭素量がわかります。過去7

万年分が測定できる資料として、近年、世界標準に認められたものです。

このほかにも黒曜石の産地分析や石器の使用痕分析など、これまで蓄積したデータや科学的な裏付けにより新しい事実がみつかってきています。

わかりにくいイメージの旧石器時代ですが、石器だけでなく取り巻く自然や、わずかに残された遺物・遺構をひもとくことで、厳しい環境を生き延びてきた私たちの祖先に思いを巡らすことができるのではないのでしょうか。

(町田尚美)